

「涌泉する魂」

貝沼 宜徳

（一）

それでは最後になりましたので、改めて最初に三帰依文を唱和して始めたいと思います。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。この身今生において度せずんば、さらにいづれの生においてかこの身を度せん。大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を発さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。

無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

最後になりました、先ほど那須先生のほうからAIの問題、人工知能の時代にあつて法蔵菩薩の分身として生きるというですね、こういうお言葉をいただきましたがですね、非常に感銘を受ける言葉をいただいたなあと、思つて、その言葉をいただいただけでも今回こちらに來た甲斐があるなあっていう、そんな気持ちで座らせていただいております。

この聞法会はですね、一昨年から始まりましたが、ずっと一貫して法蔵菩薩を課題として、そしてテーマを「もえあがれ法蔵魂」という。こういう聞法会であります。ですから非常ににつきりとした性格を持った聞法会であるという、これがこの聞法会の大きな特徴であろうかと思ひます。こういう聞法会は日本中、いや世界中探してもどこにもないという、非常に独自性を持った聞法会だと思ひます。法蔵菩薩を課題として「もえあがれ法蔵魂」というそういう中でですね、先程、那須先生のほうから人工知能の時代の中にあつて法蔵菩薩の分身として生きるという、非常に力強いお言葉をいただいたということとは、なにか大きな力をいただくというか、勇気づけられたという気持ちを持ちました。

もともとはこの聞法会というのはですね、曾我量深先生の没後五十年の記念聞法会から生まれ出てきたということがございます。そういう意味で曾我先生のごことが、特に那須先生を中心にですね、触れられるということが多いかと思ひます。ご承知のように、曾我先生が三十八歳の時だったろうと思ひますけれども、「如来我となりて我を救ひ給ふ」という、この

一語とともに法蔵菩薩を感得されたということが曾我先生の生涯の課題になっていかれるわけです。

これは言うまでもありませんけれども、大谷派の宗派の学問の上でもですね、それまで法蔵菩薩というところを取り上げられる方は一人もいなかった。もちろん本願寺派でも誰もいない。江戸時代の宗学ではほとんど無視されておったような存在が法蔵菩薩であった。今でも聞くところによると本願寺派では全く法蔵菩薩のことは取り上げられないというふうにも聞いております。そういう意味で、曾我先生が初めて法蔵菩薩のことを取り上げられたという、これがやはり、ほんとに大きなお仕事だったんだろうと思うんですね。ただ、私の場合はその法蔵菩薩のことをよく聞きしましたのは亡くなられた宗正元先生から法蔵菩薩という名前はよく聞かされました。他の先生方もいわれてないわけじゃないんですけど、特に曾我先生の教学というものを非常に大事にしていかけたのが晩年の宗正先生でありましたからね、そう思うんですけども、法蔵菩薩のことをよく取り上げてくださいました。

宗正先生は二〇二〇年五月二十日に亡くなりました。ちょうどコロナの盛んになってくる時でありまして、コメディアンの志村けんさんが亡くなったりしましてですね、日本中が真っ暗になっておるようなその最中だったですね。日本中だけでなく世界中と言ったらいいんでしょうか、そういう世界がなんか真っ暗の中にあって宗正先生が肺がんで亡くなっていたか、それということがあったんですね。その宗正先生の最後の講義

というものが二〇二〇年二月二十日でした。東京の、佛光寺派の西徳寺というお寺での講義でした。それが『歎異抄』の第十章の講義だったんですね。私も参加しておりましたし、そこに座っております私の妻の佳津代も参加しておりましたが、その時参加しておったのは十人いなかったかもしれません。

その最後の講義の時に、機の深信です。先程も那須先生の言葉からも出ましたけれども、機の深信というのは宗派の学問の呼び名でありまして、親鸞がつけた名前ではありません。宗祖ご自身はですね、『愚禿鈔』の中で「第二深信」と、こういうお言葉でいわれております。その機の深信というのはですね、法蔵菩薩の信心であると、これが宗正先生の最後の講義の時の言葉なんです。機の深信は法蔵菩薩の信心であるという。これは私、今回話をするのが決まりました時にその宗正先生の最後の講義のノートを見まして改めて思ったようなことです。機の深信は法蔵菩薩の信心であるという、これが宗正先生の最後の講義の中の一言ですよ。なにか私といたしましては、その言葉が宗正先生の遺言のように残っておるようなことでございます。ですから、今回の講義にあたりまして、私の中でずっと呼びかけ続けておるような言葉、機の深信は法蔵菩薩の信心であるという、この言葉をずっと念頭に置きましてお話ししていくことになろうかと思えます。

少し思い出話になるんですが、私が宗正元先生に初めてお会いしたのは二十四歳の時であつたろうと思うんですね。それは、名古屋の若手の有志が呼びかけてですね、東海聞

法道場というのをいっぺんやっただけですね。名古屋だけでなく三河の人が来てくれたり、それから北陸の人も来てくれました、三、四十人ぐらいだったですがね、その東海聞法道場というのを名古屋のあるお寺で二泊三日の研修会として開いたんですね。その時の講師が宗正元先生であつたという、それが私と先生との初めての出会いの時だったんです。

その三日間の研修会が終わりましてですね、最後にその研修会の面々と宗先生を交えて座談会をしたんですよ。その時の座談会で色んなことが出たんですけども、先生のほうから皆さん方がこういう研修会を開かれたことは大変大きな意味があると。そしてみなさん方の機運というものを感ずると。そういう中で最後に先生がいわれましたのはですね、「君たちはいかなる歴史を選ぶのか」という、この言葉なんです。それから今私が六十六になりましたですけども、二十四歳の時に聞きましたものですから、四十二年間問い続けられておるような言葉でございまして、私も執念深いほうでありましてですね、大事な言葉は覚えておることが多いんですけども、特にこのお言葉はずっと残っておるお言葉なんです。

「君たちはいかなる歴史を選ぶのか」と。そしてその座談会の中で宗先生が、ご自身がちょうどこの佛光寺で開かれておりました大地の会の聞法会というのがございましたが、その大地の会の聞法会というのを引き合いに出されまして、大地の会の聞法会というのは浩浩洞、真人社の歴史の中から生まれてきたんだ、そういう聞法会なんだと言われて、君たちは別

にそれにこだわらなくてもいいと。それこそ世界の中のヨーロッパのほうに目を向けてもいいだろうし、色んなところに目を向けてもいいだろうけども、だけれどどういう歴史を選ぶのかというようなことで、また繰り返すような形でいわれたんですね。浩浩洞、真人社の歴史の中から、その歴史を選んで自分たちは大地の会というのを聞法会として続けておるんだという話をしてくださったんですけども、私たちのほうはですね、そんなことは考えたこともなかったんですね。ですから、その東海聞法道場の研修会が終わりまして何回も何回も話し合ったりしまして、今後のことはどうしようかということも出たんですけども、結局は話し合いをしても埒が明かずにですね、空中分解して終わってしましましてですね、たった一年だけで終わってしまったというような会だったんですけども、宗先生が亡くなりまして、丸四年以上の歳月が過ぎてしまったんですけども、この秋になりましたですね、この言葉もまた私の中になんかずっと残っておる言葉の一つなんです。『君たちはいかなる歴史を選ぶのか』という、これがなんか、ずっと響くんですね。四十年以上前に先生から聞かされた言葉なんですけども、この、君たちはいかなる歴史を選ぶのかねという、その言葉がなにか私を捕まえて離さない。

（二）

宗先生からそういう問いかけを受けましてですね、今回私

が出しました講題が、「涌泉する魂」。こういう講題を出したんですけれども、この「涌泉する魂」という講題です、結論的に言ってしまうと法蔵魂を表したつもりです。この涌泉というお言葉はですね、宗祖のお言葉でございまして、

猶「涌泉」の如し、智慧の水を出だして窮尽無きが故に

『真宗聖典』第二版24頁

ということ。悲願を「なお涌泉のごとし」として譬えておるわけですね。その用きを「智慧の水を出だして窮尽なきがゆえに」という。ここからとったお言葉が涌泉という言葉です。これは名古屋の自分たちも、ここに何人かおりますけれども、うちの寺、興西寺で開いておる学習会ですね、涌泉洞聞法会、涌泉洞同朋会、涌泉洞輪読会という三つの学習会をやっておりますけれども、全部その涌泉というお言葉で統一しておりますね、学習会しております。興西寺というお寺なんですけれども、そういうお寺という枠にとられずに、寺院と檀家ということにも縛られずに、そういう意味であえて涌泉洞という言葉を選んでですね、学習会を続けてきたようなこと、ございます。

改めて思うんですけれども、こういう聞法ということの具本性というものは、忘れられない言葉に出合うということでしょうねえ。これは宮城顕先生は、聞法というのは言葉につかまれる経験だといわれます。こちら側が言葉をつかむんじゃない。聞法とは自分が言葉につかまれる経験だという、こういうことを宮城先生がいわれております。それがお聖教の言葉

であつたり、諸仏のお言葉であつたり、あるいは何気ない日常の言葉であつても、忘れられない言葉として生きていく。それがやはり聞法生活というものの具体性であり、私たちの人生を豊かにしてくれるんじゃないですかねえ。それで、私の眼の中に飛び込んできたお言葉が涌泉という言葉だったんですけれども、その言葉からですね、法蔵魂を表すお言葉として「涌泉する魂」ということを今回講題に出させていただいたわけです。

これはやはり宗祖の教学というところから見ますとですね、宗祖の明らかにした、大事業として忘れてならないのはやはり大行ということですね。称名念仏を大行として明らかにしたという。それを『教行信証』の行巻にあらわしてくださっておりますわけです。その行巻を見ますとですね、順番に七高僧の名前が出てまいります。龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空です。インドの方二人です、龍樹、天親。中国の方三人です、曇鸞、道綽、善導です。そして日本の方二人です、源信、源空ですね。言うまでもなく宗祖が直接に出会ったのは法然上人一人だけです。源空ですね。その直接出会った法然上人を通してですね、その背後に、法然上人を入れて七高僧として念仏の地上の歴史を明らかにしてくださった。念仏の地上の歴史ですね。それが七高僧の名前になっておるわけです。それは行巻だけでなく「正信偈」の後半部分、依釈段におきまして、七高僧が順番に龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空という名前が出てまいります。念仏の地上の歴史です。宗祖

にきて初めて、浄土教の歴史の中にあつて念仏の地上の歴史が明らかにされた。それを宗祖は「大行」という名でいわれたわけです。私たちは「正信偈」には親しんでおりますけれども、宗祖において初めて地上の念仏の歴史が明らかになった、その大事業ということを忘れてはならないということを思いますですね。

だいたい、お念仏というのは小さな声です。金子大榮先生は耳に聞こえるほどの念仏というお言葉ですね、お念仏の声を表してくださいました。耳に聞こえるほどの念仏、あんまり大きな声で念仏はしないもんですね。そんなふうに決める必要もないんですね、しかし、その耳に聞こえるほどの念仏が宗祖におきまして、地上の念仏の歴史を持った念仏なんだという、そのことを明らかにしてくださいましたねえ。このことは、いわゆる真宗門徒におきましては大いなる自信を持たんなんということを思うんですね。真宗門徒におきましては「大行」といわれておる称名念仏は地上の念仏の歴史を持った念仏だということです。

なぜならば、念仏といいますが、この日本の地に限りましてでも色んな念仏があるんですよ。宗祖ご自身が九歳から二十九歳まで二十年間、比叡山において常行三昧堂で堂僧として念仏申されておったわけです。その常行三昧堂でされる念仏のことを常行三昧といいますが、これは大変厳しい行でありましてですね、聖道門の行の一つ、いわゆる諸行の一つでありますけれども、常行三昧というのは私も比叡山の常行三昧堂

に行つたことありますけれども、九十日間不眠不休で念仏申していく行なんです。つまりこのお堂の中央のところを歩きながら念仏を申してずーつとずーつと続けていくんですね。食べることもおにぎりみたいなものをちよつと食べて念仏申していくという。眠るのも、眠りながら歩いていくという行ですね。横になることはないので、ただ僕が聞いていないのは便所ですね。便所はさすがに行つたんじゃないかと思ふんだけれども（笑）、便所は僕が調べた中からは出てませんでしたが、そういうふうに九十日間不眠不休で常行三昧の中をぐるぐるぐるぐる回つて行が常行三昧です。これが比叡山の念仏を代表しておるものです。その常行三昧堂で念仏しておられた人が宗祖です。

そしてもう少し言えば、宗祖ご自身が誕生したといわれる日野に法界寺というお寺がありますけれども、その日野の法界寺にも常行三昧堂がございます。ですから、おそらく宗祖は生まれ育つた日野の地におきまして、法界寺の常行三昧堂において常行三昧をしておられるお坊さんたちに触れたということとは間違いないことでしょう。つまり、九歳から二十九歳という形で比叡山で常行三昧のお念仏を申しておられたといえますけれども、常行三昧のお念仏を知られたのはもつとご幼少の頃からですね、常行三昧としての念仏に親しんでおられたということがあろうかと推測されます。けれども、その比叡山の念仏をすてたんです、宗祖は。そして法然のおられる吉水教団に行かれたわけです。そしてその吉水教団では法然

上人が提唱されておりました選択本願念仏、専修念仏といわれますけども、その選択本願念仏を選びとられたわけです。つまり、宗祖が比叡山をすてたということは、比叡山の念仏をすてたということです。そして法然の提唱されておられました吉水教団における選択本願念仏を選びとられたわけです。比叡山の念仏をすてて吉水教団の念仏を選び取られたわけです。それを『選択集』の中のお言葉でいうと、「雑行を捨てて正行に帰する」という。漢字の説明みたいになりますけども、宗祖の場合は「雑行を棄てて本願に帰す」です。「棄」の字なんです。法然上人の場合は「捨」です。同じすてるでもすて方が違うんですね。「捨」の字の捨てるはゴミを捨てるというようにいらんものをするという意味です。「棄」の字はなかなか厳しい字で、赤ん坊をゴミ取りに乗せて棄てるという意味です。つまり、すてられんものをするという意味です。だから、すてられんものを発見しとるわけです。宗祖にとつては、「雑行を棄てて本願に帰す」といった場合は、雑行をすてられんものとして見出しとられるということです。その違いです。だから法然上人の「雑行を捨てて正行に帰する」といった場合は、雑行というものはつきりと「いらんもの」という、厳しい選択があるわけです。宗祖の場合はそうやないんですね、まず「雑行をすてられんもの」として見出しとるということです。これが大きな違いですけど、それは今は止めておきますけどもね。

だからですね、そういうように宗祖の生涯におきましても

色んな念仏がある。仏教の行としての、聖道門の修行の一つとしての念仏、常行三昧ですね。それから選択本願念仏という念仏。もう少し広く念仏というものを考えてみますとですね、例えばうちのお寺のご門徒さんにはこういう方がおられました。お医者さんだったんですね、もうその人は亡くなりました。したですけどもですね、お参りに行きましてその方からお話を聞かせていただいたことは、何べんもあるんですけども、非常に正直な方だなあとこのことを思っただんですけども、自分の診ている患者さんがなかなか病気が治らないと自分のお家のお内仏ですね、あの患者さん治りますようにといって念仏申しておられたんですね。そのことを何度か私に聞かしてくださったんですけども、そういう形の、お祈りとしての念仏というんでしょうか。非常にこのお医者さん信用できるといいますか、正直な方だなあと思っただんですけどもね。自分のお祈りのようにして申す念仏。これがある種、世間一般に思われている念仏というのはこういう形をとることが多いんじゃないでしょうか。例えば自分のお孫さんの受験が受かりますようにということですね、お念仏申されていくという、こういうことも多いんじゃないでしょうか。これも念仏の一つの形でしょう、無碍に否定する必要もないと思うんですけどもね。

私が読んできた中で面白いと思ったのはですね、小説家の遠藤周作という人がおりましたですけども、私、遠藤周作が好きでほとんど読んでおるんですけども、その中のエッセイで

ですね、遠藤周作が京都の木屋町で幽霊を見た話があったんですね。京都の木屋町で遠藤周作は幽霊を見たんですけども、そうしましたら思わずあのクリスチャンの遠藤周作がナンマンダブツナンマンダブツと言うてまったといつて(笑)、その言うてまった自分に驚いてエッセイを書いておるんですよ。そういうこともあるんですよ。日本人の血なんですかねえ。自他ともに認めるクリスチャンの遠藤周作が幽霊見たら念仏が出てもうたというんですね、面白おかしくエッセイに書いておるのを昔読んだんですけどもねえ。

だからナンマンダブツと言いましても色んな念仏があるんですよ。これだけは私たちが心得ておかならんでしょう。浄土教の中で言えば、例えば時宗の念仏もありますね。一遍は舞台を作つてですね、その上で踊るんですから。踊り念仏といわれます。あるいは現在の浄土宗になりますと、百万遍なんて言葉でいわれますけども、大きな数珠をみんなで回しながらお念仏するという。京都に百万遍という地名がありますけども、あの近くに知恩寺というお寺がありますけども、そこでされておる念仏はそれですわ。大きなお数珠をみんなで囲んで一つ一つ渡していく形でみんなでお念仏するという。その数が百万遍だということであの百万遍という地名がついたんですから。そういう念仏もあるわけです。

〈三〉

だからなにも、念仏と言いましても色んな念仏がある。その

中で宗祖におきまして初めて地上の念仏の歴史が明らかにあった。地上の念仏の歴史を持った念仏なんだということです。これは法然上人の場合はまだ地上の念仏の歴史というのは明瞭になっていません。『選択集』の中の教相章の中にはですね、一番初めのところですけども、「浄土宗にまた血脈あり」というお言葉で表されておる部分がございます。血脈ですね。念仏の血の歴史です。念仏といつてもですね、血がつながっているという。血脈というのは非常にいい言葉ですよね、深い親しみを感じるような言葉でしょう。宗祖のご消息に『血脈文集』というのがありますけども、ここから取っとるんですね。だけでも、法然上人におきましてはまだ地上の念仏の歴史は明瞭ではない。

宗祖にきて初めて七高僧の歴史として地上の念仏の歴史が明らかにあった。それを宗祖は太行として『教行信証』の行巻、並びに「正信偈」の後半において明らかにしてくださいださったんですね。それで、その宗祖が明らかにしてくださいださった地上の念仏の歴史ということを私は泉に譬えたいんですね。何故ならば、これは安田理深先生が阿弥陀仏の本願のことを地下水に譬えられますねえ。つまり、念仏の地下の歴史を本願といい、それを地下水に譬えられる。その地下水が泉として湧き出てきた。これが地上の念仏の歴史ということです。ですから、安田理深先生は本願のことを、「根底に流れるもの」という表現で表されております。非常に形而上学的な言葉ですね。根底に流れるものという。人類の根底に流れるもの。人間の根底に流れるも

のとして本願を表してください。

だから、そういう意味におきまして今回私自身が提起してみたのはですね、法蔵菩薩というのは阿弥陀仏の本願の人格的表現なんだという、こういう言葉でちよつと表してみたいと思うんですね。と申しますのは『大無量寿経』には五つの異訳がございまして、その五つの中で法蔵菩薩のことを表しております。『平等覺経』におきましては、法蔵菩薩のことを音写するという形で曇摩迦留と出ております。これはもともとのサンスクリット語に返しますとDharmakaraと。ダルマのほうは言うまでもありません、「法」です。カーラというのは辞書にもありますけれども、「鉢床」という意味です。あるいは「鉢脈」。鉢脈のほうがいいですね。ここら辺から安田先生が根底に流れるものなんという言葉をを出してくるんですけどもね。それから『如来会』では法蔵菩薩のことを、まだ比丘の時代でありますけれども法處比丘という。法のよりどころ、今日の言葉でいうと存在の根拠というのが『如来会』に出てまいります。

ですから、安田先生は地下水、根底に流れるものといわれますね。人類の地下水として流れているものですよ。そうやって本願を表記してくださいとおるわけですね。

それで、有名なお言葉が曾我量深先生の、法蔵菩薩は阿頼耶識であるという言葉です。これは非常に有名なお言葉でありますけれども、これが、蓮如の相伝の教学というのは『大乘起信論』に立った如来蔵思想によつて法蔵菩薩をとらえます。そ

れは相伝の教学の中に、『略本私考』という『文類聚鈔』について書かれたものがあるんですけども、この『略本私考』の中には法蔵の「蔵」について蔵の三義を立てます。繰り返しますけれども、蓮如の相伝の教学では『大乘起信論』にもとづいた如来蔵思想ということを立てますので、それによつて法蔵の蔵について三義を立てるということです。一つには、隠蔵です。

これは蔵という字はですね、かくすという意味です。つまり蔵というのは、色んなものを隠している場所です。それを表す言葉が隠蔵です。だからいまでも日本では旧家の家に行きますと蔵があるような家があります、その蔵というのは色んなものが隠されている。ですから如来蔵思想に立つて言えば、法蔵の蔵は如来を隠しているということですね。如来を隠しているという。

それから二番目は含蔵です。阿頼耶識の場合だと先ほど那須先生もお話くださったけども、蓄積という意味ですね。含蔵。どんどんどんどんものを蓄積させていくということです。つまりどんな経験も蓄積されていくわけです。私たちの経験というのは必ず蓄積されていく。けれども、経験というのは忘れていきますね。それは私たちの意識の問題であつて、経験そのものは必ず蓄積されていくんです。ただ忘れていくだけということですね。ですからこれはボケた人のことを「二度童子」といいます。最近はいいませんですけども、二度童子というのはどういふことかと言いますとボケてしまいますとですね、三歳以前の世界に帰ってしまうというわけですね。これは直接

聞いたんですけれど、宮城先生のお母さんがそうなりまして、お袋が完全にボケてしまつて色んなことをしゃべるんだけど、だーれも分からんという。だーれも分からんけども事細かに詳しく話してくれるんだと。よく聞いとるとお袋が育つた小さな頃のことを思い出してると。お袋自身も忘れておつたこと、だいたい三歳以前のことはみんな忘れてますから、それがボケることによつて甦つてくるという。そういう意味で昔の人はボケた人のことを二度童子という言葉で呼んだらしいんですね。だから経験というのは必ず蓄積していくんですよ。問題は私たちはそれをほとんど忘れていくということでありまして、それがまた何かの縁で思い出されるということもある。しかもそれが一番極端な形に現れるのがボケた時だという。いまですつかり何にも覚えていないように思つていた三歳以前のことを思い出してくるといふんです。意識の問題というのはおもしろいですね。阿頼耶識のことを蔵識といいますけども、その蔵というのはとにかくなんでもかんでも詰め込んでいくんですよ。さきほど那須先生はゴミ箱といわれましたですけども、全ての経験を蓄積していく。それを私たちが意識しているかいらないかもまた問題ですけども、いずれにせよですね、覚えておるといふようなことはほんの微かなことじゃないでしょうか。

三番目が出生ですね。これは安田理深先生は如来を妊娠しているという、こういう表現で表されたことがあります。私たちは煩惱成就の凡夫とこういわれますけども、その身は如来

を妊娠している身だということですね。これはもともと身という字は解字しますと(𠂔)、一番上の部分が頭です。下が足なんです。おなかの中に一つ点が入つてますでしよ、これは胎児を表します。つまり身という字そのものが中国におきましては妊婦を表していると。つまり、もう一つのいのちを宿しているという。肉体的生命に対して言えば宗教的生命と言つてもいい。『安心決定鈔』なんかでは「阿弥陀の御いのち」なんて言葉もあります。もう一つのいのちを宿しておる身だと。これは身という字が表しておるわけです。それが出生の義によれば、如来を妊娠しているということです。

これらのことを総合していえばですね、法蔵菩薩を宗教心の象徴というような言葉で一般的にいってもいいのかもしれませんが。以前には私は無上菩提心の象徴というような言葉で法蔵菩薩を表したんですけども、今回は法蔵菩薩のことを地上の念仏の歴史を成り立たせる地下水として、本願の人格的表現と、こういうふうに言つてみたいんですけどね。本願の人格的表現。

七高僧で表わされます地上の念仏の歴史を成り立たせている地下の念仏の歴史、泉と地下水の関係ですね。泉として湧き出てきた地下水。したがいましてですね、ちよつと図式してみますとこういう構造になろうかと思ひますね。こういう一つの構造が表されてくると思ひます。念仏の歴史に二種ありという、地上の念仏の歴史と地下の念仏の歴史であるというこ

念仏の歴史

地上 — 泉 — 七高僧

地下 — 地下水 — 法蔵菩薩

大行 — 大信

とです。地上の念仏の歴史は泉に譬えられる七高僧。地下の念仏の歴史は地下水に譬えられる法蔵菩薩。その地上の念仏の歴史と地下の念仏の歴史を総合して大行と。そしてその大行がそのまま大信を開くと。こういう構造として大行を考え、大信を開くものとして考えますと非常にはつきり明瞭となってくるんじゃないですかね。泉が湧いてくるためには常に地下水が流れていなければならない、根底に流れるものですね。その地下水は枯れることなく流れ続けておるわけでしょう。だけれども時々、泉として噴出してくるわけでしょう。その泉として噴出してきた方々の教えを私たちは学ぶことの縁に遇わせていただいたわけですよ。

宗祖が七高僧という名前を出されましたですけども、お一人お一人が色んな先生に遇われたこともあるかと思いますが、親鸞聖人なら親鸞聖人がやはり泉の代表者ともいえますでしょうし、宗祖なければこの泉の存在なんてものはないからなかった。そしてこの地下水は人類が滅亡していくまで、いや、人類が滅亡してもなお続くかもしれない。それが兆載永劫の修行でしょう。そうした地下水がずーっとずーっと流れ

続けていく。終わりが無い。だけれども、時々縁さえあれば泉として湧き上がってくださる。そこに宗祖は七高僧の名前を出されるわけです。大行というものの構造をこのように考えてまいりますとですね、非常に明瞭になってくるんじゃないでしょうか。『教行信証』の行巻というものはまずこの視点で読まれていくということが大事だと思いますですね。非常に明確にいただいている。

で、この法蔵菩薩という存在でございますが、誰も取り上げることのなかったその法蔵菩薩を生涯かけて明らかにしてくださったのが曾我先生の恩徳でございますね。そういう意味では曾我先生の泉というのはですね、ものすごく大きく噴出してくださったと思いますよ。今でもその影響の中で、曾我先生で表わされておる泉を飲み続けておられる方々がおられるわけですから。だから未だに枯れていないわけですよ。

〈四〉

ただそのやはりですね、七高僧で表わされる地上の念仏の歴史を泉とし、法蔵菩薩で表わされるような本願を地下の念仏の歴史として地下水として表したとすると、それがそのまますま称名念仏の歴史であります大行となるわけですけども、そこにやはりですね、大信、信心という問題が残るわけです。これがやはりですね、そこまでいきませんと……。地上の念仏の歴史が七高僧として表されたわけでありますけれども、その

七高僧それぞれがやはり信心を表白されておるといふことがあるわけですね。

七高僧それぞれがありますけども、有名なものが、例えば日本のことでは、「愚痴の法然房」といういわれ方を法然上人ご自身はされます。それから源信僧都は、「予がごとき頑魯のもの」といってお言葉を使われますね。これが『往生要集』の中に出てきます。頑魯といってお言葉で愚かさを表される。さすがに教養のあつた方だと思えますね、頑魯というのは「頑」は頑固の頑、カチカチだということです。「魯」というのはこれは魚が口をパクパクと開けておる姿です。そういう姿に愚かさを見たのが漢民族なんですわ。魚が口をパクパクパクと開けて何言つとるか分からんってなもんですわ。私も金魚を飼つておりますけれども、よう口を開けてパクパクやってますからね（笑）。何言つとるか分からん、そこに愚かさを見たという。この頑魯といってお言葉で源信僧都は表しています。

というようにですね、七高僧それぞれが何らかの形で愚かさというものを表白されておるんですけれども、なかでもやはりその代表といわれるものは善導大師の、機の深信でしょうねえ。

自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して出離の縁有ること無し

（『真宗聖典』第二版242頁）

という、このお言葉がやはり機の深信といわれるだけあります

して、信心の表白の中で最も有名であり、このお言葉を抜きにして信心は語れんという言葉でありますね。これを『愚禿鈔』におきましてはですね、「第一深信」として取り上げてあるわけです。今回初めに言いましたようにですね、宗正元先生の生涯の最後の講義におきまして、機の深信は法蔵菩薩の信心であるという、こういうお言葉を聞いたわけでございます。そのことを受けまして、機の深信は法蔵菩薩の信心であるという先生のお言葉を受けまして一つ言えますのは、機の深信ということでは表わされてくる信心は歴史的信心であるということですわ。つまりそれは個人的信心ではないということですわ。つまり、ごく平凡に申しまして、どうしてもですね、愚かというようなことをいいますと個人的になつてしまふという、この問題がいつも残るんですね。愚かさに目覚めなさいなんてことを法話なんかでお話しされる方もありますけれども、その愚かさが感情の問題で終わつてしまふ。自覚の問題にならない。ここが愚かさの一番の問題ですわね。愚かということでは、愚かに帰れとかですね、いろいろいうんです。例えば自分のことを反省したらですね、ああ自分は愚かだなあなんてことは思うことはあるわけですよ。誰でもそうですね、完璧な人間なんて一人もいませんから、ちよつと反省してみれば自分のことを愚かということをおもうわけですよ。でもそれは感情の問題であつて自覚の問題ではないでしょ。感情の問題は、言つてみれば方便なんだ。自覚の問題にならなければ真実にはならない。ええ。だけでも愚かかということは大体その

方便の部分だけで喜んじるんだ。私は愚かでありますっていつて平気で言つとるでしよ。本当に愚かならね、自分のことをそう簡単に愚かとは言えませんよ。愚かという資格もない。自分の愚かさは誰でも反省すればですね、感ずることはあるんだ。しかしそれが自覚になっておるかという問題が残るんです。その問題が一番大事なんだ。その問題に応えておるのが『愚禿鈔』なんですよ。『愚禿鈔』の第一深信を見てください。

一には、決定して自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して出離の縁有ること無しと深信すべし。
(『真宗聖典』第二版520頁)

と。そしてまとめるようにして、

第一の深信は「決定して自身を深信する、」即ち是れ自利の信心なり。
(同)

という。「決定深信自身」という形で表わされております。この中でお気づきかと思えますけれども、これは『愚禿鈔』における特徴なんですけれども、その第一深信の場合は、「深信すべし」という命令形、呼びかけになっておるといふことです。これは『教行信証』の信巻には「ざいません、『愚禿鈔』におきまして、あくまでも命令形として、宗祖は聞く立場におられるといふことです。つまり、第一深信を表しておられるわけですけれども、そこに命令形として表されておる。自分の表白として機の深信を、第一深信を表しているわけではない。つまり、機の深信、第一深信を聞くという立場に身を置いておられるのが『愚禿鈔』における宗祖の態度です。これを私も耳にタコ

ができるほど、藤元正樹先生から、『愚禿鈔』には親鸞の肉声があるんだ、『教行信証』にはない親鸞の肉声があるんだといふことをですね、耳にタコができるほど聞かされましたけれども、こういうところですね。『教行信証』ではわからない、『愚禿鈔』になつてはじめて機の深信を命令として聞いておられる立場の宗祖が見えてくるわけだ。

つまり宗祖は、私たちに何をいわんとするかと言えは、聞くといふことだけが自覚を開いてくるということなんです。何かね、私たちはですね、聞くといひましてもですね、すぐ単純といふか軽くといふか、そんなことぐらいにしか思つていないんですね。あるいはなんか予定概念を持つて聞いてしまうといふね。質問する時もそうですよ、ある程度自分で答えを決めておきながら質問するといふこともあるでねえ。それぐらい人間といふのはやつかいなものですよ。質問すりやええかといふと、そういうものでもないんだ。質問した人よりも聞いとる人のほうが深いといふ場合が多いね。つまり、予定概念みたいなものを持つて聞きますからね、聞く方も、己を虚しゅうして聞くなつてことは容易でない。予定概念を捨てて聞くといふ。聞くといふことは一番単純なことのようにだけれども、一番難しいんだ。

この欲聞会の「欲聞」という言葉は一応私が選んだ言葉ですけれども、これは『大無量寿経』の性格を表しておるんですよ。『大無量寿経』の正宗分が始まっていく直前のところですよ。

阿難、諦らかに聴け。今、汝が為に説かん。

（『真宗聖典』第二版9頁）

と釈尊がいったことに對して阿難が応えたのが、

對えて曰わく、「唯然り。願樂して聞きたまえんと欲う。」

（同）

という。その願樂欲聞ですね。釈尊ご自身はですね、阿難一人のためにこの『大無量寿經』を説かれておるんですよ。それが『大無量寿經』という經典の特色です。正宗分はそうなんです。会座にはいっぱい菩薩も集まっていますからね、ああ仰山の方がこの『大經』の説法を聞いてるんやなあとと思いますけれども、釈尊ご自身は阿難一人のために説かれたという。聞くというのはそういうことですよ。私一人のために説かれ、私一人が聞く。一番單純なことのようだけれども、この覺悟ができないですよ。汝が一人のために説くといった時の阿難の応えが「願樂欲聞」なんです。釈尊の説法を聞く勇氣と情熱にあふれた阿難の言葉ですわい。願樂欲聞。ここから欲聞という言葉を取ったんですよ。仏法は私一人のために聞くわけです。だから聞くということは一番單純なようだけれども、一番難しい。聞くということが定まれば、あらゆる出来事、あらゆる人生経験、どんなものからでも聞くことができる。これは一番もつとも豊かな人生じゃないですか。ええ。どんな人生経験であろうとも、どんな出来事であろうとも、どんな人からでも聞けるとするならば、こんな豊かな人生はないでしょう。

ですから、この機の深信というようなのはですね、個人的な信心というものじゃない。それを宗先生は、機の深信は法藏

菩薩の信心であるといつてくださっているように思うんですね。それを私自身が受け取り直しますとね、信心もまた歴史的信心だということでしょう。七高僧の名として、七高僧を泉としてですね、本願の地下水が湧き出てきた信心がやはり機の深信なんでしょう。七高僧それぞれが機の深信の自覺を表しておられる。それをどこまでも聞く立場におられたのが宗祖ご自身だということが、この『愚禿鈔』の表記においてはつきりしてまいりますね。ですから、宗祖の信心と言いましても、他力の信心。あるいは念仏の信心と言いましても、個人的な信心ではない、やはり宗祖におきまして表された歴史的信心。ですから、大行、大信としてですね、念仏も信心も表されますけれども、念仏も歴史を持つておると同時に信心もまた歴史を持つておるものだというでしょう。

したがってですね、行と信というものは離れるものではない。行から信が開かれてくる。それを行から見た信と言ったほうがいいんですけどもねえ。行から信を見るということがないと、信心といつてもどうしても個人的にとらえられる。それは一つの個人の心境に終わつてしまふ。私は救われましたっていう、それだけのことだ。行から信を見るといった場合は必ず歴史というものに着目しなければならぬということが教えられるわけです。そして信心ということも、信心というものもまた個人的なものではないということですね。ですから、歴史ということが非常に大事なんだということです。法藏菩薩という名そのものが個人を超えた歴史を表している。

ですから、人工知能、AIの時代になればなるほどこの歴史というところですね、この歴史というところに私たちは着眼していくことが大事なんじゃないでしょうか。AIなんてのは優れてますけども、まだ出てきたばかりですから何の歴史もないんだ。人間の歴史、その中で燦然と輝く私たちの念仏、そして信心、これはもう歴史ですよ。こういう時代ならばこそですね、私たちに与えられておる歴史ですね、念仏の歴史、信心の歴史、これこそがやはりいま私たちが胸を張って勇気をもって生きていく糧にしなきゃならんものじゃないですかねえ。

初めに戻りますけれども、やはりこの四十年以上前に宗正元先生からいただいた、君たちはいかなる歴史を選ぶのかねという問いがですね、やはりなんかこう、今回自分としては先生からいただいた問いを自分なりに応える形でですね、お話ししたかったわけでございます。地上の念仏の歴史としての七高僧を生み出してきた地下の念仏の歴史としての法蔵菩薩この二重の歴史ということをもつてして大行とされる。それがそのまま、泉と地下水として譬えられると言っているんじゃないかと思うんですけどもね。そしてその大行はそのまままた大信を開く。そしてその信心がやはり歴史的信心であるということを表してくることであると思いますね。今日の時代というのはどこまでも個人が個人を主張してくるような時代です。個人がどこまでも個人性に埋没してしまう時代です。色んな共同体に属しておりながら、その共同体に属しておる

ことよりも全て個人性の中に埋没していかうとしてしまう。そんな時代だからこそやはり、歴史というところに目を向けるということがやっぱり大きな力を持つてくるんじゃないですかねえ。

時間がきましたので止めておきましょう。

質疑応答

宮田

ありがとうございました。己を虚しゅうして誰か質問はございますでしょうか(笑)。

なかなか質問しづらくなっちゃったなと思うんですけども、一ついいですか。行巻に説かれる、「大行は則ち無碍光如来の名を称するなり」という、単純に読めばそれはやつぱり行為として名を称えるということですけども、これは、大行とは歴史であるとずっと色んな先生から教えられてきたんですけども、その名を称えるということがなぜ歴史なんだということをずっと疑問としてあったんですけども、先程の話の中で、大行、大信ということでこれが歴史ということですが、その念仏を称えるということが歴史っていうのが、もう少しお言葉をいただきたいなということを思います

貝沼

やはり『教行信証』の基本的性格としてですね、〃宗祖の書

いた『浄土論』である」という意味があるんだということを安田先生はいわれます。つまり、『浄土論』に戻してですね、尽十方無碍光如来という名そのものが『浄土論』の冒頭の帰敬序の言葉でありますから、特にこの言葉を選ばれておるわけですね。

『浄土論』の構成に戻して考えてみますとですね、『浄土論』の前半部分はご承知のように「願生偈」でございませう。そして後半部分が散文となっていて、ずっと内容的には五念門の行が取り上げられてくるわけです。ですからこの、前半部分であります「願生偈」におきましては二十九種莊嚴という形で浄土の莊嚴が説かれてくるわけです。つまり浄土の莊嚴ということでは表わされておりますのは世界観ですね。浄土の世界観というものが説かれていますし、五念門の行として表されておるものが歴史観なんですね。つまり、「世尊我一心帰命尽十方無碍光如来」の一心の後景としての五念門を散文部分で説かれまして、そして前半部分の「願生偈」におきましてですね、二十九種莊嚴功德という形でですね、世界観が説かれてくる。これが一心の前景といわれます。つまりこの念仏ということといわれておりますのはですね、五念門を背景として『浄土論』における二十九種莊嚴が成り立ってくる。つまり、端的にいつてしまえば歴史観が世界観を開くということですね。そこは実は僕は言おうと思っておったんですけども、とてもそれは数分でもいいようなことではなかったので止めましたですけれども。

その念仏、ここで「大行は則ち無碍光如来の名を称するなり」という、わざわざ無碍光如来という言葉を持つてくることの所以ですね。その念仏は歴史を持った念仏であって、それがさらに世界を開いてくるという。そこまで見通したお言葉がこの「大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり」という、『浄土論』全体をこの言葉でつかみ取っておるわけです。だから、一心というところが信心でありますけれども、行と信は離れないという意味におきましてですね、「無碍光如来の名を称するなり」ということにおいて開かれてくる信心において、その歴史観によつて世界観が開かれてくるということですね。同時にですね。

この豊かさですよ。つまり、『浄土論』で表されております、私たちにおいて念仏の歴史観が五念門として展開し、さらにその五念門において二十九種の莊嚴として表されておる浄土の世界観が開かれてくるという。そういうことをポイントとして「大行は則ち無碍光如来の名を称するなり」という。壮大な着眼点なんですよ。この一点にここで集約されておるけれども、そこで宗祖がいたのは、『浄土論』におけるその全体像としての歴史観と世界観。そして歴史観が世界観を開いてくるということに眼を開けと勧めておられるわけです。そういう眼を通して『教行信証』の場合では真仏土、化身土が開かれてくるわけだ、宗祖は。これがまた宗祖の独自の眼でしょう。莊嚴功德として二十九種で表わされた浄土がさらに真仏土、化身土といつてですね、宗祖の教学としていえば還相回向

の世界として二つの世界がまた表されてくるという。こういう立体性を持つておるわけですね。そういうことのポイントとなっておる言葉がやはりこの言葉でしょう。

だからこの単純なたった一言なんですけども、いかに私たちが縁をいただいております念仏というものが壮大なものなのかという。その壮大さを最も端的な言葉で表わしたのがこの、「大行は則ち無碍光如来の名を称するなり」という、この一語にこもっておるわけですよ。ええ。宗祖の教学がいかに壮大なものであるかということを表しておる言葉だと思わずにはおれないですね。以上です。

那須

地涌の菩薩を曾我先生が法蔵菩薩に類した形で語っておられますね。

貝沼

『法華経』ですね。

那須

はい。そうですね、その地下に法蔵菩薩があるという。これは素晴らしい考えで、無意識の世界が還相であるしね。ただ、『法華経』で地涌の菩薩が地上にのぼったのがかえって悪いんじゃないですか。いわゆる国家思想になったり。地上に出てからその菩薩を率いる人として上行菩薩として日蓮は働くでしょう。だから僕が言いたいの、地上に出るということと地下に潜ってずっと歴史を作っていたか、いわゆる法蔵菩薩とそれの違いとか、それをどういうふうに考えたらい

かなと。

貝沼

そういう意味では地上の救主として法蔵菩薩のことを語られたということもありますからねえ。ただまあ、私が申し上げたかったのは法蔵菩薩というのを本願の人格化という表現で今日は表したものですから、あくまでもその地下水として根底に流れているものの本願というものをですね、表した表現として法蔵菩薩ということをしたかったわけです。曾我先生なんかの場合は地上の救主という形でも法蔵菩薩を表されるということがありますね。しかしあの『地上の救主』という言葉自身はやはり、あの当時の時代の状況を考えますとやはりキリスト教の神に対する非神話化ということの影響を受けた言葉じゃないかなと思うんですけどね。やはり、特にキリスト教の場合は『旧約聖書』になりますと神話はたっぷりですからね、そういうものを非神話化していかんなんという運動が西洋では始まっておる時に、やはり曾我先生の眼にありました法蔵菩薩というのを地上の救主という表現で表わされたということは、非神話化という中で出てきた言葉じゃないかなと思うんですけどね。

地涌というのは私の場合、自分の寺の寺報の題にとるんですよ。それぐらい好きな言葉なんですけどもね。もともと曾我先生の六十歳の還暦記念講演の中に、『法華経』の地涌の菩薩の名前がたくさん出てくるものですから、そこからとった言葉でありまして、安田先生がいわれた言葉では、曾我さんは

地涌の菩薩だけはちよつと羨ましかつたんだなあという、『法華経』が（笑）。無名人がポンポンポン出てくるわけですから。だからただ、大地から湧いてくるという、涌出してくるという意味ではやはりいい表現だと思っんですけどねえ。

宮田

『地上の救主』だと地の宗教と天の宗教ということの比較でいわれているのかなあという気はしますね。

（二〇二四年十月二十日 真宗佛光寺派本山佛光寺 白書院）